

ベリトフ論 (一)

金子 幸彦

(1) ベリトフ論 (一)

ゲルツェンのロマン『誰の罪か?』(一八四五—一八四七)は、その形式の上でも、内容の上でも、それ以前のロシア文学に見られなかった、新しい性格をもっている。そしてチエルヌイシエフスキイ、シチェドリーン、スレプツォーフらをはじめとする十九世紀六〇年代以後の作家たちの、いわゆる「思想小説」あるいは「社会小説」の先駆をなすものとされる。このばあい文学史家たちの用いている「思想小説」あるいは「社会小説」という語の意味は必ずしもつねにはっきりしたものではないが、作品における、詩情にたいする思想の相対的重視という点では一致している。思想のない文学も、社会とかわりをもたぬ文学も存在しないとはいえ、思想をとり

わけ重視する文学、あるいは重要な思想を表現している文学、また社会的問題を直接的に提示し、あるいは社会的課題の解決の道を示そうとしている文学というものはあるだろう。これはゲルツェンやチエルヌイシエフスキイのように、なによりもまず思想家であり、社会的、政治的問題について直接に発言していた作家の小説においては当然に予想されることであろう。

ロマン『誰の罪か?』はこの意味で文学における思想の重視の傾向を詩情にたいする思想の優位にまで強めたものと言うことができる。しかしロマンのこのような性格がただちに詩情の稀薄化を意味するものではないだろう。もともと詩情と思想は両立しがたいものではない。それゆえ思想の強さが直接に芸術性の弱さを意味するものでもなく、ゲルツェンの作品が文学と科学との境界へ

の、すなわちそれを越えたと文学が文学でなくなる限界への接近を意味するものでもない。たとえば、トルストイがゲルツェンをロシアの五大作家のひとりに数えるとき⁽¹⁾、それはトルストイが文学の概念をひろく解釈したということではなく、ゲルツェンの作品をロシアの代表的文学と考えていたことを意味するだろう。

しかし一般に「思想小説」あるいは「社会小説」というような名称が、芸術的完成の点では不充分であるが、思想の上で、あるいは社会問題の提起の上で重要であるような小説にたいして、用いられているばあいの多いことも附言しておこう。

『誰の罪か?』の文学的特質は、この作品が発表された当時において、すでに読者の注意をひいていた。ペリンスキイはその論文『一八四五年のロシア文学』のなかで、ゲルツェンが思想を诗情のかわりとするることによって、芸術のわくをひろげ、芸術の新しい可能性をひらいたことを強調するとともに、この作家が「智力を诗情にまでみちびき、思想を生き生きとした人物に変え、自己の観察の果実を劇的な動きにみちた行動に移す、すぐれた能力を示した⁽²⁾」ことを指摘している。

ロマンの第二部が発表されたのちに書かれた論文『一八四七年のロシア文学』のなかでは、ペリンスキイはゲルツェンの才能が描写の対象よりも対象の意味を重視するような種類の才能であり、そのような才能の作家にあっては、「対象の正確な提示によって、その意味がすべての者にあきらかになり、理解されるようにするためにのみ、その靈感は燃えあがる⁽³⁾」とのべている。「それゆえ——とペリンスキイはつづける——彼らには、なによりもまず一定の、はっきりとした目的があり、诗情はこの目的を達するための手段にすぎないので、彼らの才能に適した生活の世界は彼らの大切にしている思想、生活にたいする彼らの見解によって規定される⁽⁴⁾」。

その後ルナチャルスキイは論文『ゲルツェンと四〇年代の人々』(一九三九)のなかで、おなじ見解をつぎのような簡潔なことばで表現している。「ゲルツェンは感情的、情緒的表現から理念に向かうのではなく、理念から形式に向かうところの、もつとも典型的な作家である⁽⁵⁾」。今日ゲルツェンの研究者たちはゲルツェンの作品の特質について語るとき、ペリンスキイの右のことばを引用するとともに、この特質を文学と科学との新しい結びつ

(3) ペリトフ論 (一)

き、この二つのものの統一として説明するのがふつうである。この説明は、それが詩情と思想との結びつき、あるいは思想に支えられた詩情を意味するなら、正しいであろう。しかしそれが文学でもなく、科学でもない、その中間のなにかを意味するなら、正しくないであろう。

ゲルツェンのような作家にあっては作品の客観的意味とともに、作者の思想および創作の意図も重要な意味をもっている。彼らは現実について自分の意見をのべ、判決を下すためにのみその現実をえがくのである。しかしゲルツェンは、当時のロシア政府の検閲のもとで、しばしば比喩、暗示、反語、逆説などを用いなければならなかった。この小論の課題は『誰の罪か?』の右のような特質を考慮しつつ、主人公ヴラデーミル・ペリトフの文学史的位置をたずねることである。

ロマンは第一部と第二部とに分かれている。第一部ではおもに登場人物たちの生活の歴史がたえられる。その第一章において、退役將軍ネグロフと彼の家に住みこむことになった家庭教師ドミトリー・クルツイフェルスキイとの会見がえがかれ、これが物語における事件の発

端を形づくる。第二章はネグロフの伝記、第三章はクルツイフェルスキイの伝記で、クルツイフェルスキイの父親である貧しい地方医師の生活の歴史が織りこまれている。第四章においてネグロフ家の日常生活がえがかれ、ネグロフの妻の生い立ちと結婚後の生活、ネグロフと農奴の女とのあいだに生まれたリユーボニカの生活と意見、リユーボニカとクルツイフェルスキイとの恋愛がえがかれる。

第五章においてはじめてペリトフが登場し、NN市の貴族選挙に出馬する。第六章においてペリトフの母親の伝記、ジュネーヴ人の家庭教師ジョゼフのもとでのペリトフの教育が物語られる。第七章においては大学を卒業したペリトフの、官庁への就職と退職、医学志望、画家修業の試みがたえられ、彼の外国旅行から帰国までのことがえがかれる。

作者は登場人物の伝記をつたえることによって、人間の性格の形成の歴史、個性の社会的意識のめざめの過程、人間の行為、社会とのその関係をあきらかにしようとしている。そして人間個性の形成過程がさまざまな要因の影響のもとに、いかにして一定の方向をたどるか

示すことによつて、農奴制のもとの社会的環境の破壊的役割を讀者のまえにあきらかにし、このロマンの表題にたいする答えを準備する。すなわち作者はつねに人間の個性を社会的關係の所産と見て、これを環境からきり離すことなくえがき出している。

それゆえにまた、このロマンのなかで否定的な役割を演ずる人物、たとえばネグロフとその妻、貴族団長とその妻なども、生まれつき悪い人間ではなく、環境によつて損われた人間であることが示されている。作者はネグロフ夫妻について語りつつ、「彼らは無意識に粗暴だったのだ」(四三)⁽⁶⁾と書いている。

しかし作者は不合理な社会的環境の破壊的役割を示すとともに、またそのような環境にゆがめられることなく、これへの抵抗のなかに鍛えられてゆく、つよい個性をもえがいている。リユーボニカはネグロフの家のなかで不幸な少女時代を送らなければならなかったが、不幸は彼女をうちくたくことなく、彼女の心に、否定的な現象への、はげしい嫌悪と高いものへのあこがれを植えつけた。作者は彼女が「生まれつき強い智力と精神の力にめぐまれていた」(四九)とのべているが、さらに母親の

農奴の血が彼女を救ったことを示している。彼女の性格は民衆の生活の影響のもとに、民衆との接觸の過程のなかに形成された。彼女は農奴の子供たちの方が貴族の子供たちよりもはるかにすぐれていると考へる。下層の民衆へのこの愛情と地主生活への嫌悪を彼女はその日記のなかに書きつけている。リユーボニカの形象は、ロシア社会に、まわりの現実を拒否し、個人的な利害のなかにとじこもることをしないで、この現実からの出口をさがし求める世代が成長しつつあったことを示している。

ペリトフの善良な母親も農奴の出身であった。ペリトフにおける下層の民衆への愛情、社会的問題への関心はこのことと無關係ではないだろう。こうして作者は登場人物の性格、思想、行動の要因を讀者のまえにあきらかにしてゆく。

ペリンスキイが第一部のこの形式上の特質の一つを規定して、「これは本来の意味のロマンではなく、伝記の連なりである」とのべつつも、「それらの伝記は一つの思想によつてたがいに結びつけられているが、限りなく多様な、深く真実な、そして哲学的意義のゆたかな伝記である」と語るとき、彼も作者の上述のような意図を指

摘しているのである。こうしてこのロマンの第一部は、ベリンスキイの右のことはを用いるなら、「伝記の連なり」であり、そこに一貫したプロットが欠けているかのように見えるが、これらはたがいに関係に記述されているものではない。登場する、さまざま人物の運命と生活は、密接な結びつき、あるいは関連をもって、第一部の内容を構成しつつ、全体として第二部への序曲となっている。

作者自身ロマンのこのような構成を重視していた。このロマンを掲載することになっていた『祖国雑誌』誌の編集者クラエフスキイあての手紙で、検閲その他の考慮から一部を変更あるいは削除する必要のあるばあいには、必ず原稿を送りもどしてくれるようにと依頼しつつ、彼はつぎのように書いている。「この物語は個々の章およびエピソードから成り立つはずであるが、統一的なまとまりをもっているので、一部分を削除することは全体を損うことになり⁽⁸⁾ます。」

二

第二部では、もはや伝記的記述はなく、人物の描写は

内面的な生活の領域に移る。そしてロマンは主人公ベリトフについての、またロシアの現実との、この人物の衝突についての、統一的な物語りに変わる。

第一章では、外国から帰ったばかりのベリトフのまえに、ロシアの典型的な県庁都市としてのNN市のすがたがくりひろげられる。作者はベリトフの目をおして、この町の、うすよごれた、陰気な風景をくわしくえがいて見せる。

彼は貴族選挙に立候補する手続きとして、県知事、貴族団長、地方検事、裁判所長など町の有力者を訪問する。これらの人々の奇怪な生活と言動はベリトフを驚かせるばかりであった。彼が宿舎にもどって、ひとりひとりの人物のすがたを思い出しているうちに、それらの人物は一つにとけ合って、「なにか恐ろしく大きな体をした役人の幻想的な顔になった。その巨大な役人は眉をしかめ、むっつりとして、打ちとけない、しかし自信ありげな様子をしていた。……ベリトフはこの巨人とはとても太刀打ちできないことをさとした。」(一一〇)

こうしてNN市とその住人たちとのすがたは農奴制的ロシア全体の現実を象徴する。

ペリトフは、作者のことばによれば、NN市の紳士たちが有益なカルタ遊びにふけているときに、たえず有害な本を読んでいる人間であり、「ヨーロッパの放浪者で、自国においてもよそ者であり、外国においてもよそ者であり、その態度の優雅さにおいて貴族的であるが、その信念において十九世紀の人間である。」(一二二)このような人間はNN市の地主や官吏たちの世界にうけいれられるはずもない。それはゴーゴリの『死せる魂』(一八四二)の主人公パーヴェル・チチコフの活躍する世界である。チチコフならば、NN市の有力者たちによって、自分たちの仲間として歓迎されただろう。

ペリトフの苦悩と不安の本質はNN市の社会との葛藤のなかに表現される。彼はこの町にきてからひと月もたたないうちに、地主や官吏たちのすべてから憎まれるようになった。

「ペリトフは彼らの利害のなかにはいることができなかった——と作者は説明している——また彼らも彼の利害のなかにはいることができなかった。そして彼らはペリトフが彼らの生活にたいする抗議であり、ある種の暴露であり、彼らの生活の秩序全体にたいする、ある種の

反論であることを感じとって、彼を憎んだ。」(一二三)そして彼は当然のこととして落選する。NN市の貴族や役人たちのあいだで彼がどんな政治活動をもなさないことはあきらかである。しかもこのような、みじめな活動の舞台さえ彼のまえにはとざされている。

第一部でペリトフの伝記を語った作者はここで、NN市の上流社会によって代表される、当時のロシアの現実との、ペリトフの衝突の原因、ペリトフの「余計者」的性格の形成の過程を要約しつつ、これに一つの評価をあたえる。

作者はペリトフの生活の失敗が彼における実生活との分離、実生活上のさまざまな結び目をとくための分別の欠如にあること、またそのような分別の欠如が彼の教育に起因することを指摘している(一二二)。すなわち作者は深いイロニーをこめて、すこぶるきびしい態度で、ペリトフの生活に一つの決算をあたえ、彼の余計者の性格に判決を下しているかのようである。しかし作者のこれらのことばには、もう一つのもっと本質的な意味がふくまれているように思われる。ジュネーヴ人の家庭教師が「ペリトフから人間一般をつくり上げた」(一二〇)とい

うとき、作者はこれを農奴制的現実への適応力をもたない、抽象的人間という意味に用いている。第一部の第六章で家庭におけるベリトフの教育についてのべている部分でも、作者はこの教育の非実際性を指摘しているが、そこにはかかれていない諸事実はやはり二重の意味をもっている。すなわち作者の説明と描写の客観的意味とは一致していない。この不一致は作者が、検閲にたいする考慮から、ことさらに意図したものと考えられる。

のちに見るように、ベリンスキイはベリトフの「余計者」的性格の形成の要因が彼の教育、財産、資質のなかにあるものと考えている。すなわちベリトフの無為と退屈はオネーギンやペチョーリンのばあいとちがって、もはや社会の責任ではなく、社会的意味をもつことができないうことである。今日若干の研究者は作者が、ベリトフの少年時代の教育の描写を通じて、当時の貴族的教育の非実際性を批判しているものと考える。ベリトフのうけた教育が第一に、パンのために働く必要のない人の世界でのみ可能なものであるという意味で、第二に、それがゲルツェンによって個性の解放への、したがって行動への前提と考えられていた科学に正当な位置を

与えていないという意味で、このような見解は一面の眞実をもっているであろう。そしてこの見解はベリトフの評価、彼の生活の意味の理解において、ベリンスキイとおなじ結論にみちびくだろう。しかしベリトフの教育は当時のロシアの貴族の家庭で子供たちのうけていた教育とは本質的にちがっている。さらにベリトフの描写の客観的意味は作者ゲルツェンがベリトフの形象をそのようなものとして理解していないことを示している。このことは彼の教育についての描写の部分だけでも理解できる。

ジュネーヴ人の家庭教師の教育の理念はヨーロッパの啓蒙思想の一つの頂点を示している。彼はベリトフの心に高い理想を植えた。ベリトフは一度もうそをついたことがないし、生活の重荷も生活の恐怖も知らない、そして思いやりのある少年として育った。彼のすがたを見ていると、人は心のあたたまるのをおぼえるのだった。彼は民衆の生活を知らなかったとはいえ、民衆への愛情をもっていた。それには農奴の出身であった母親の影響と同時にジョゼフの教育の影響がある。たとえば、のちにベリトフ家の下男のひとりがつぎのように語って

いる。「むろん、若だんなのおやさしい心は親ゆずりのものだけだな。なんといっても、つまりあの先生の感化があるんだよ。わしはいまでもおぼえているが、村の子供が若だんなにおじぎをすると、あの先生がかならず若だんなに、帽子をぬいでおじぎを返すように、言いつけたもんだよ。ほんとに神さまみてえな人だった。」(一五二)

ペリトフはモスクワ大学の倫理・政治学部にはいった。「彼は若い友人たちから熱烈な同情をもって迎えられ、すべての美しいものに心をひらいて、熱心に勉強した。」(九四)このみじかいことばのなかに、作者はそのころのモスクワ大学の学生グループの活動を暗示している。教授もペリトフに注目し、「彼がもう少し髪をみじかく刈って、行儀をよくしたら、申し分のない学生になるだろう」(九四)と考えていた。ペリトフは大学を卒業し、官庁に勤めることにきまつた。彼は自分の力と才能を自覚し、頭のなかには、さまざまな希望や計画や夢がうずまいていた。

ジョゼフはペリトフの家を去るにあたって教え子につきのような手紙を書き送った。「運命のさし示す道を進

みなさい。それはすばらしい道です。わたしは失敗や不幸は心配しません。それは君に力をあたえ、勇気をおこさせるでしょう。わたしは成功と幸福をおそれます。君はいま危険な道の上に立っています。仕事に奉仕なさい。そして反対のこと、すなわち仕事に君に奉仕することにならないように気をつけなさい。ヴォルデマイル君、手段と目的とを混同してはいけません。まわりの人人にたいする愛、善にたいする愛だけが目的でなければなりません。君の心に愛が涸れてしまったら、君はなにごともしえないでしょう。愛だけが生命のある、確固としたものをつくり出すものです。傲慢さは、それが自分以外のなものをも必要としないものであるゆえに、実りのないものです。」(九八)

ジュネーヴ人のこの手紙の内容をその抽象性以外の点で非難することはむづかしい。一般に彼の教育活動とペリトフにおけるその成果とをとがめることはむづかしいであろう。その後においてもペリトフは聡明で、善良で、誠実であり、けっして怠惰でもなく、無責任でもない。彼はロシア文学の「余計者」的主人公のなかではもっとも善良な人物である。

しかしジ・セフは生活の暗い、みにくい面を、ベリトフの目から、かくしていた。教育におけるこのような消極的態度が現実の認識を妨げたことはたしかである。それゆえ若いベリトフは現実の否定的な側面、あるいはすくなくとも彼が希望し、期待しているところとはちがった事態に出会ったとき、これに正面から反対して、自分の意見を主張するよりほかの方法を知らなかった。そのため彼はやがて役所の仕事に冷淡になり、ついにやめてしまった。もし彼が現実生活の否定的な側面をも充分に知っていたなら、これに対処するすべを心得ていたかもしれない。しかしそのためには、自分の理想をまげなければならなかったろう。彼が勤務をつづけてゆくためには、妥協、忍従、あきらめ、さらにずるさとか、抜け目なさとかいうものが必要であったろう。彼がそれらのものを身につけて、官庁勤務において成功したとしても、社会にどれほどの利益をもたらすことができただろう。ベリトフがそのころのロシア社会で彼にとって可能であった職業の領域において、上述のような犠牲をばらった職業上の成功をかちえたとしても、それは客観的にはさしたる意義をもつものではないだろう。加うるに彼

には大きな財産があったので、彼は生活の資をうるための仕事につく必要がなかった。

これらの事情によって問題は抽象的ではあるが、一層するどく、かつ純粋な形で提出される。作者はジョゼフによるベリトフの教育、ベリトフにおけるその成果を批判しつつも、現実とのベリトフの衝突という事実には読者の注意を向けている。ベリトフが善良な、賢い人間であればあるほど、これを拒否するロシア社会の現実は否定的なものとして読者の目にうつる。

三

ベリトフは官房の職をしりぞいたのち、医学を学び、画学を志したが、いづれも長つづきしなかった。「生まれつき頭のするどい彼は、新しい仕事の上でも、たちまちいろいろな問題に直面した——と作者は語っている——それらの問題にたいして医学は学問的な沈黙を守っており、それらの解決にはほかのすべての問題の解決が必要であった。」(一〇五)そして彼はまもなく医学にたいして、また医者にたいして幻滅をおぼえはじめた。それから画家になろうと決心して、毎週エルミタージュ美術

館に通った。彼は歴史画をかこうと考えていた。しかし、作者のことばによれば「彼には仕事にたいする満足が欠けていた。また外部的には、芸術家的な環境や芸術家を支えている、生き生きとした相互作用や意見の交換が欠けていた」(一〇六)。そこでこれもつづかなかつた。ゲルツェンはこれらの事実をつたえたのち、そのことの、もっと基本的な原因について、つぎのように書いている。「彼の活動を呼びおこすものがなにもなかったのだ。彼の活動はだれにもまったく必要のないものであった。彼の個人的な欲求によってのみ決められていたものなのだ。しかしなによりも妨げになったものは、勤務とか政治活動についての、かつての、さまざまな夢である。情熱的な性格をもった人間にとっては、生起する諸事件、目のまえに完成されてゆくこの歴史に参加するほど誘惑的なものはこの世にない。このような活動についての夢想をひとたび自分のものとした人間は、ほかのすべての領域の仕事に適しない人間になってしまう。彼はなにをやっても、いつも客人のような立場に立つ。彼が無条件にたずさわることのできるような仕事の領域はそこにはない。彼は芸術のなかに政治的な論議をもちこむ

だろう。画家になれば、思想を絵にかくだろう。音楽家になっても、思想をうたうだろう。別の領域の仕事に移ることによって、彼はおのれを欺くだろう。それは祖国をすてた人間が、自分はどこにいても同じことで、自分が役に立つところが自分の祖国なのだ、とむりに信じこもうとするようなものだ。いくら努めてみても、やはり心のおくその声がつこく彼を別の場所へ呼んで、別の歌、別の自然を思い出させるのである。こういう考えが、あるときはぼんやりと、あるときははっきりと、ベリトフの心のなかを去来するのであった。」(一〇六)

作者がロマンの第一部第七章に挿入した、これらのことばを、当時の検閲官は、すくなくともこれを削除しなかつたという意味で、見のがしている。さらにその後の研究者たちも、すくなくともこれに言及する者がいないという意味で、これに注意をむけていない。しかしここにはベリトフをして「余計者」的生活を余儀なくさせた本質的な原因の一つが指摘されている。ここへのべられていることばは、文字どおりの意味よりほかに、これを理解することができない。この思想は作者のものであると同時にまたベリトフのものである。「こういう考えが

ペリトフの心のなかを去来した」のである。ペリトフをして一つの仕事に集中することを妨げたものは「政治的活動についての、かつての、さまざまな夢想であった。」この夢想は、少年時代にジュネーヴ人によって、また大学時代に学生グループの生活と大学教育によって、ペリトフの心に植えつけられたのである。

人間は客観的世界の法則にしたがいつつも、この法則の試練によって豊かなものとなる。個性が思想のなかに深まるにつれて、それはますます意識的な、自由な個性となる。これはゲルツェンの書『科学におけるデレタニチズム』、とりわけその第四論文の基本的主張の一つであろう。思想はたえず知識を求め、客観的現実に対する認識と判断を求める。客観的現実が個性のなかで理論的に認識され、実践的に再組織されなければならぬ。それゆえに思想は人間に社会的活動を要求する。しかも教養ある人間にとって、心にめざめた思想を消し去ることはむづかしい。

「思想を抑制することはどんな激情を抑制することよりもむづかしい——と彼は別のところで語っている——思想は知らず知らずのうちに人をみちびく。感情や空想

や、結果にたいする恐怖などによって、思想を拘束する者はそれを拘束するであろうが、しかしこのことはだれにでもできることではない。思想が優位を占めている者にあつては、応用性とか事の難易とかが問題なのではない。その者は眞実をさがしもとめ……⁽⁹⁾ 仮借するところなく、公平無私に原則を実行する。」

ゲルツェンがこのような見解をペリトフのなかに反映させようとしたことはたやすく理解できる。ここにペリトフの思想と行動との矛盾、また現実との彼の葛藤のすべての意味を解く鍵があると思われる。作者は思想を抑制することのできない者は、もし最も本質的とみずから考へる仕事にたずさわることがゆるされないなら、そのほかのどんなことをしても、情熱をもってこれをなしとげることができないということを語っているのである。しかしこのことと、十九世紀四〇年代のロシアの現実の客観的諸条件、すなわちこのロマンのなかでも、のちに見るように、リューボニカヤクルーポフの形象のなかに反映しているような、社会的な目ざめの時期がはじまりつつあつたという事実とは別のことである。作者は実生活におけるペリトフの失敗の基本的原因を指摘すると

もに、彼の心理、彼の生活の意味を説明しているのだから、彼の行動のすべてを是認しているのではないだろう。このことはすくなくとも第一部でのペリトフの描写における、作者のつよいロニーによっても知ることができる。

ここにロシア文学の歴史のなかではじめて「余計者」の社会的本質と社会的立場、したがってまた「余計者」的存在の発生の社会的原因がはっきりと示されている。しかしこれらのものの内容が不変のものではなく、時代とともに変化していること、ペリトフの結果において無為の生活に追いやったところの、みだされざる、政治的、社会的活動への情熱も、オネーギンやペチョーリンの心にはまだ目ざめていなかったという事実にも注意することが必要である。ペリトフの形象のなかに作者自身、また当時の先進的な人々の世代の伝記的事実が反映していることはあきらかである。

第二章で作者はクルツイフェルスキイ夫妻の幸福な家庭生活とこの幸福のなかでのクルツイフェルスキイの不安について語る。この家庭は、かつてクルツイフェルスキイの結婚に反対し、家庭生活というものが人間の自由

と両立しがたい、エゴイステイクなものであるという確信をもっていた懷疑主義者のクルーポフ医師にとっても、唯一の休息と慰めの場所となっている。

クルツイフェルスキイは妻への愛情に没頭し、現在の幸福を失うことをおそれて、未来をおそれている。彼は家庭のその問題には関心をもたない。勤め先の中学校の教師としての生活も彼にはなんの意味ももっていない。現在の幸福が彼のすべての思考をのみつくしてしまっている。「ときどきぼくは自分の幸福がおそろしくなるんです——とクルツイフェルスキイはクルーポフに語る——大きな財産をもっている人のように、未来のことを思うと、体がふるえ出すことがあるんです。どうしたら……。」(一二九)

クルーポフは夫婦がたがいに相手を偶像視して、自身自身のために相手を独占してしまつて、ただ自分だけの悲しみのために泣いたり、自分だけの幸福を喜ぶというような生活を批判し、まわりの人々の利益への奉仕の必要を主張する。クルツイフェルスキイとクルーポフとの会話の内容は、第五章にはじまるクルツイフェルスキイの家庭的悲劇を予告し、この悲劇の意味をあきらかにし

ている。

この章のおわりでベリトフがクルーポフにつれられて、クルツイフェルススキイの家庭をおとずれる。そしてこの家庭の知的な雰囲気の中に救いを見いだすと同時に、クルツイフェルススキイの妻リユーボニカに心をひかれてゆく。第三章では貴族団長の粗野な家庭生活、およびこの家庭とのクルーポフの衝突がえがかれ、また貴族団長夫人を中心にベリトフとリユーボニカとにたいする中傷が準備される。

クルーポフもまた雑階級人であるが、クルツイフェルススキイよりも、はるかにつよい生活意識と社会的関心をもっている。『エヴゲーニイ・オネーギン』のレンスキイを思い出させるクルツイフェルススキイが十九世紀三〇—四〇年代のロシアのロマン主義者の特質を具現しているとすれば、クルーポフはそれにつづく唯物論的段階を表現している。これは自然科学的唯物論であり、作者はこれを「医学的唯物論」(一五八)と呼んでいる。クルーポフは下層の民衆への同情と地主の寄生的生活への、つよい敵意とをもっている。彼はエゴイズムを批判し、個性の自由を主張する。そして自分の仕事への確信をも

ち、他人への奉仕をおのれの使命と感じている。これはロシア文学がかつて知らなかった、全くあたらしいタイプの人間である。このことはレールモントフのロマン『現代の英雄』(一八四〇)のなかの医師ヴェルネルと比較することによって一層はつきりする。しかし彼の社会的関心もまだ政治的な自覚にまで立ちいたることはない。それゆえ彼はベリトフを愛していても、その悩みを理解しようとしないうし、彼との会話においても相手を説得することができない。これはある程度雑階級人と貴族インテリゲンツィヤとの立場のちがによるものであるが、同時にクルーポフとベリトフとの政治的自覚のちがいにもよるであろう。

クルーポフはベリトフの無為の生活がその財産のせいであり、生活のために働くことは社会のためにもなるのだと語る。ベリトフはこれにたいして、人間は飢え死にしないために働くのではなく、目的をもって働くべきだと答える。クルーポフがりっぱな労働者にはいつも仕事があると言うと、ベリトフはリオンの労働者は働く意志をもちながら、仕事がないために、餓死しているではないかと反論する(一五五)。クルーポフのことはそれぞれ自

身として正しいが、彼はペリトフの思想と心理を理解することができない。作者はこれらの会話によっても「余計者」的性格の特質を示し、「余計者」的存在の本質的な問題に照明を与えている。

四

右の会話は第四章で行なわれるが、それに先立ってペリトフはジュネーヴからジョゼフの死の知らせをうけとり、自分の若いころのことを思いうかべ、また自分の実りない三十年の生涯をふりかえりながら、深い悔恨の念をおぼえる。「彼はあのころの自分といまの自分とをくらべてみた——と作者は書いている——そこにはなんの共通のものもなかった。あのころの自分は希望にみちあふれ、自己犠牲の宗教を信じ、献身や無報酬への心構えをもっていた。いまの自分は外面的な諸状況にうちまかされ、希望もなく、氣ばらしのためにかさをさがし求めているにすぎない。」(一五三) このような気分のなかで彼はクルツイフェルスキイの家を足しげくおとずれるようになった。ペリトフ、リユーボニカ、クルツイフェルスキイのあいだにできあがってゆく関係の背後には、

ロマンの第一部でのべられた、彼らの外面的な、また内面的な生活の歴史がある。リユーボニカのたえず成長してゆく精神は夫との、おだやかな生活のなかに満足を見いだすことができないので、ペリトフとの出会いは彼女の心を急速にめざめさせた。

クルツイフェルスキイはおだやかな性格の人間で、大卒を卒業して、現実のなかにはいったとき、彼をまっていたのは窮乏と屈辱の生活であった。彼は次第に空想の世界に喜びと慰めを見いだすようになる。「彼は現実のたたかいはいることは考えなかった——と作者は語っている——彼は現実の圧迫から身をしりぞけて、人が自分をひとり静かにしておいてくれることのみを願っていた。」(一五七) それから彼はリユーボニカに出会って、恋する夫となり、妻への愛情のなかにとじこもってしまった。彼は自分のまわりに欠けているものを新しく作り出してゆく能力をもたないので、作者のことばによれば、「精神のもっと現実的な要求を愛のなかに求め、自分の妻のつよい性格のなかにすべてを見いだしていた。」(一五八)

このような消極的な生活や閉鎖的な愛にたいするゲル

ツェンの批判は一八四二—一八四五年ごろの彼の日記や短文のなかにしばしば見られる。これはやがて一八四六年夏のグラノーフスキイらの「ロマン主義」との論争に発展する。『気まぐれとためらい』と題する評論の第一論文『ある戯曲について』(一八四三)のなかでも、彼は個人生活と家庭生活の問題をとりあげている。「愛は一つの契機であるが、人間の生活のすべてではない。愛は個人生活を個人的な意義の点で飾り立てる。しかし排他的な個性のそとにも、やはり人間に属しているところの、あるいは人間がそれに属しているところの、ひろい領域がある。これらの領域において個人は個人であることをやめることなしに、その排他性を失うのである。愛の独占は、その他の独占とともに、これをうちやぶることが必要である。」⁽¹⁰⁾

ゲルツェンは恋愛や家庭生活の意義を軽視しているのではなく、生活における個人的なものと一般的なものとの統一の必要を指摘しているのである。一八四二年九月の日記のなかで、彼は結婚が人を現状への満足、消極的な空想性、創意の欠如にみちびき、せまい生活関心のなかにとじこめてしまうならば、もっとも不合理なくびき

となることを強調しつつ、つぎのように書いている。「人間は個人的な感覚のなかにのみとじこめることはゆるされない。人間にとって救いの錨は理念のなかに、一般的利益の世界にある。人間の精神はこの二つの世界のあいだに存在する。」⁽¹¹⁾

クルツイフェルスキイの不幸は、彼が善良で、けっしておろかでもなく、子供るときから苦しい生活をつづけてきたにもかかわらず、心の美しさを失わなかった人間であるだけに、読者につよい印象をあたえ、それだけに問題は一層はつきりとした形で提出されている。しかしクルツイフェルスキイの形象の意味をこの問題の提出だけに限定すべきではないであろう。ゲルツェンはクルツイフェルスキイの苦しみ多い生い立ちを物語ることによって、この雑階級人の弱さの根源をも明らかにしている。作者はクルツイフェルスキイ、リユーボニカ、クルーポフのような誠実な人々ばかりではなく、クルツイフェルスキイの父親の商売がたきであった、ぬけ目のない医師や、NN市の中学校の、酒好きの教師たちのような人々をもえがくことによって、雑階級人のさまざまなタイプをつくり出した。

ここでつぎのような図式化が可能であろう。すなわち『自然研究書簡』においてゲルツェンが示した「唯心論」(スピリトゥアリズム)と「経験的認識」との対比はロマン『誰の罪か?』のプロットの展開に独自の役割をしている。唯心論はクルツイフェルススキイのなかに具現し、クルーポフは経験的認識を代表する。ペリトフは潜在的行為者、あるいは活動家で、思弁と経験との総合である。ゲルツェンの説く経験と弁証法との統一としての「レアリズム」は現実を、また行為を志向する。作者がペリトフについて「内面的にはきわめて行動的で」「生まれつき大胆な、するどい思考力をもっている」(一二一)とのべていることはこのことと一致する。しかしロマンのなかでは現実への、また行為へのペリトフの志向は実現されない。しかしそれが外部的な原因によるものであることは読者の目にはあきらかである。

ペリンスキイは『誰の罪か?』の作者が雑階級人のクルツイフェルススキイを弱い、消極的な人間としてえがいたことに不満であった。そしてクルツイフェルススキイとリューボニカとの形象は彼らがネグロフ將軍の家で「彼らを取りまくすべてのもののために苦しんでいる」とき

にのみ興味あるものと考え⁽¹²⁾る。十九世紀四〇年代のロシヤ社会において新しく登場しつづつあった雑階級人の指導者としての自覚をもっていたペリンスキイにとって、これは必要な政治的立場であったかもしれないが、彼の批評の原則と必ずしも完全には一致しない。なぜなら文学の任務は、ペリンスキイによれば、理想の光のもとに、現実をあるがままのすがたにおいて正確にえがくことであり、批評の原則は文学作品における現実描写のこの正確さを検討し、そこにえがかれた現実を理想の、したがってまた社会的課題の見地から、批判することであるからだ。最近ソ連のロシヤ文学史家ゴレーロフは貴族的革命性にたいするゲルツェンの懐疑的態度を指摘しつづつも、同時にロマンのなかでのクルツイフェルススキイの役割は作者が雑階級人のなかにも歴史的な未来を認めることができなかったことを示すものと語⁽¹³⁾っている。

しかしゲルツェンが四〇年代にすでに将来のロシヤ文化の建設における雑階級人の活動を予感し、これに期待をよせていたことはこのロマンの描写の客観的意味とも一致する。さらにこのことは手紙や日記をふくめた、ゲルツェンのこの時期の文章その他によってもあきらかで

ある。

ロマン『誰の罪か?』におけるゲルツェンの課題の一つは、雑階級人を理想化することではなく、そのさまざまな代表者を登場させて、十九世紀四〇年代なかばの現実のなかでの、すなわちその発達の初期の段階におけるこの階級のすがたをえがくことであつた。それゆゑその肯定的な面と同時に否定的な面をもえがかなければならなかつたであらう。クルツイフェルスキイはこのロマンに登場する多様な雑階級人の一つのタイプにすぎない。しかも作者はけつして雑階級インテリゲンツィヤにたいする貴族インテリゲンツィヤの優位を示そうとしていてのではない。このロマンはロシア文学の歴史のなかではじめて前者の肯定的側面をえがいたのである。これらの雑階級人にたいする、主人公ベリトフの態度のなかにも大きな進歩がある。彼は貴族階級のあいだで完全に孤立しているばかりではなく、貴族たちの憎悪のまとなつてしまつてゐる。彼は貴族階級のなかにはもはや語るべき相手を見いだすことができない。彼が親しく交際してゐる人たちは雑階級人たちである。

ベリトフは多くの恋愛を経験したのちに雑階級に属す

るリューボニカにはじめて本当の愛情をいだいたのである。しかもベリトフにたいするリューボニカの精神的優位はだれの目にもあきらかである。このロマンのなかの最も高い人物が雑階級人に属する婦人であるということとはゲルツェンがこの階級の未来に大きな期待をかけていたことを示すものであらう。わずか二人半の農奴の所有者で、経済的には事実上、雑階級人と異なるところのなかつたルーヂンでさえ、その交際の範囲は貴族階級に限られていた。彼を熱烈に崇拜していたラスィンスカヤ家の家庭教師バシーストフにたいしても、彼はつめたい態度をとつてゐた。ベリトフは遺産相続権をすてていないという意味で地主であり、貴族階級から完全には分離してゐなかつたが、その社会的意識はすでに貴族階級を離れてゐた。このばあいベリトフの母親が農奴の出身であつたということも偶然ではなからう。このことはロシア文化の建設における貴族階級の指導的な役割がすでに失われつつあつて、貴族インテリゲンツィヤそのものが貴族的特質をすてて民衆の立場に近づきつつあるという事実が作者が気づいてゐたことを示してゐる。

しかしゲルツェンは貴族インテリゲンツィヤにつづく

新しい階級人インテリゲンツィヤの登場を、後者による前者の排除、両者のたたかいという形ではなく、両者の協力、将来のロシア文化の、また一般にロシア社会の民主化にともなう貴族インテリゲンツィヤのインテリゲンツィヤ一般への解消という形で考えていた。それゆえ六〇年代になって『同時代人』誌の批評家たちとのあいだに「余計者」の歴史的役割についての論争が行なわれたとき、「余計者」にたいする、また一般に貴族インテリゲンツィヤにたいする、チュルヌイシユフスキイ、ドブロリューボフらの批判は、彼の目には、困難な時代的條件のなかにきずかれた、古い世代の遺産をことさらに軽視してこの古い世代に石を投げる、粗暴な行為として映ったのである。(未完)

(1) A. B. Гольденвейзер, *Близни Толстого*, т. I, М., 1939, стр. 92—93.

- (2) В. Г. Белинский, П. с. с., т. IX, А. Н. М., 1955, стр. 396.
- (3) Там же, т. X, стр. 319.
- (4) Там же, стр. 319.
- (5) А. В. Дунчаарский, А. И. Герцен и люди сороковых годов, сб. Статьи о литературе, М., 1957, стр. 170.
- (6) А. И. Герцен, Кто виноват?, Собр. соч., т. IV, А. Н. М., 1955, стр. 43. 以下本論文におけるこのロマンティック引用文末尾の数字はこの巻のページ数を示す。
- (7) В. Г. Белинский, П. с. с., т. X, 1956, А. Н., стр. 325.
- (8) А. Г. Герцен, там же, т. XXII, стр. 251—252.
- (9) Там же, т. VII, стр. 163.
- (10) Там же, т. II, стр. 67—68.
- (11) Там же стр. 228—229.
- (12) В. Г. Белинский, П. с. с., т. X, стр. 321.
- (13) А. Е. Горелов, *Очерки о русских писателях*, Ленинград, 1961, стр. 176.

(一橋大学教授)